



この「ちゃべるにゅーす」が配布される頃には、世の中はクリスマスモード一色に染まっていることでしょう。そして柳城でも、短大や附属各園でクリスマス礼拝などの行事が行われます。この季節に、わたしたちが「キリスト教主義の学校に学ぶ」とはどういうことなのか、改めて考えることには意味があると思います。

あたりまえと思うかも知れませんが、クリスマスに登場するイエスは赤ちゃんです。これはある意味わたしたちの理解を超えるできごとです。ただ飼い葉桶に寝ているだけの赤ちゃんが神の子であり、救い主である方が赤ちゃんだといふのです。30歳くらいのイエスが突然天から降りてきて働きを始める、というのであればまだ理解もできたでしょう。しかし神の計画はそうではなかったのです。イエスはマリアの胎内で生まれ、そして生まれてからも両親に面倒を見てもらいながら成長することを神は求められたのです。神はヨセフとマリアの手、そして彼らを助ける多くの手を必要とされたのです。

神の子がこの地上に生まれたということ、
「神が人となった」とキリスト教では表現します。それは、力や強さを発揮するためではなく、弱さや痛みも含めたわたしたちのすべてを、その身に担ってくださるためでした。わたしたち

が自分たちのもろさ、はかなさ、傷つきやすさを悲しまなくてもよいように、こわがらなくてもよいように、イエスは赤ちゃんの姿で生まれてくださったのです。

柳城は主として保育と介護福祉という二つの分野で教育を行っています。このいずれの分野においても、人間のもろさや傷つきやすさと真摯に向き合うことが求められます。わたしたちの建学の精神「愛をもって互いに仕えよ」は、このことがどのようにして可能になるかを語っていると思います。それは、力や能力に

「キリスト教主義」 の学校に学ぶということ

チャプレン・講師 司祭 ダビデ
市原信太郎

よってではなく、無力なわたしたちが、同じように無力な仲間と一緒に歩んでいこうとする中で初めて可能となるのです。

このクリスマスの季節に、わたしたち柳城がキリスト

教精神に基づく共同体であるということに改めて思い起こしましょう。そしてそれは決して力や強さではなく、むしろ眠る幼子のような無力さによって成り立っているということを大切にしましょう。自分自身についても、わたしたちがたくさん持っている弱いところ、いやなところ、欠けているところ、誰にも知られたくないところ、そこにこそ幼子イエスの姿があることを信じて生きていきましょう。

クリスマスおめでとうございます。

クリスマスを迎えるよろこび

尾上 明子

クリスマスと聞くと、なんとなく心がうきうきしたり、幼い頃のことを思い出したりしませんか？もはや国民的行事になった日本のクリスマスですが、先ごろ日本でも初めてクリスマス切手が発行されたことをご存知でしょうか？世界ではキリスト教国であるなしにかかわらず、クリスマスには美しい切手を発行し、それが外貨獲得になっている国があるほどです。

さて、キリスト教国のクリスマスは、イースター（復活祭）とともに特別なときとして、喜びのなかにも心静かに迎える準備をします。そのような雰囲気を感じて頂きたいと思い、本学では、2000年度より海外のクリスマスの習慣を紹介したり降誕人形などを展示するなどして、キリスト教の大きなお祝いであるクリスマスを知るための工夫をしてきました。ささやかなコレクションですが、そこからいくつかをご紹介します。

キリストの降誕人形

中世に盛んに造られ始めた降誕の人形は、すでに8世紀にはローマの教会に存在していたと言われていました。これらの人形は、クリブ（英国）、クリッペ（ドイツ）、クレーシュ（フランス）ベレン（スペイン）などと呼ばれ、教会や家庭でイエス・キリストの誕生を偲ぶものとして置かれます。キリストは馬小屋の飼い葉おけで誕生したと想像されていますので、たいていは馬小屋の中に聖家族、東方の賢人たち、羊飼い、家畜などが小さな赤ん坊を取り囲む構図で造られています。降誕を祝う心がこの人形たちに託されています。小さなものはくるみの殻の中に、大きなものは等身大のものまであります。また国や民族によって特徴が出て、それぞれに味わいがある

ります。写真は、フランスの修道院で造られているもので、マリアがイエスに添い寝しているのは人間的であると同時に、とても珍しいものです。



光のピラミッド

クリスマスと冬至は深い関係があります。北半球においては、12月21～22日は、太陽が照る時間が1日で最も短い冬至にあたります。本当のキリストの誕生日は不明ですが、12月25日とされるようになったのは、冬至を過ぎて太陽が明るく輝きはじめる季節と深くかかわっています。冬至に向かって弱くなっていく太陽のなかで、この世に光をもたらすキリストが、ろうそくの灯火と重ね合わされました。それだけでなく、古代ヨーロッパでは、地上の生命が衰えた冬枯れの季節にあたたかい光の復活を願い、新しい年の豊作を祈る祭りを行っていました。これは、冬至祭や収穫祭として今日も伝えられています。ですから、キリストの誕生を祝うことは、太陽の復活を願うことや豊作を祈るという土着の信仰を取り込んで発展してきたのです。クリスマスツリーのオーナメント（飾り）も、素朴なローソクの光、リンゴや木の実、麦わらが使用されました。写真の『光のピラミッド』や窓辺に置くキャンドルスタンドも、その暖かい光が重要なのです。キャンドルの灯火は太陽を元気づけるためとも、また、窓辺の灯火によってマリアを導くためとも、さ迷い歩く人々を導くためとも言われています。これらはどれ

も、職人が手作りし、温かいぬくもりを感じさせるものばかりです。

『光のピラミッド』は、ドイツ・エルツ地方の鉾山職人の手によって生まれました。ろうそくに火を点すと上昇気流によって上部の羽が



回転し、羽に連結された下部の人形も同時に回転します。

煙だし人形

これも、エルツ地方などで作っている伝統的な木製人形です。ヨーロッパに昔から伝えられた、クリスマスの頃に現れる死霊や小悪魔を追い払い、室内を清めるために造られたものです。人形の胴体が2つに分かれ、中に香を入れる受け皿がついています。火を点すと人形の口から良い香りの煙がもくもくとはきだされます。サンタクロースのルーツである聖ニコラウスや伝統的な行商人、月や星を擬人化した人形があります。光のピラミッドとともに遊び心をくすぐる楽しい置物だと思いませんか？ぜひ、展示室でご覧ください。



麦わらのオーナメント (ツリー)

麦わら細工は世界中にあり、日本でも多種多様なものが作られてきましたが、北・東ヨーロッパでは、先に述べたように収穫祭と深い結びつきを感じさせるものです。日本ではあまり見かけませんが小麦粉でかたく焼しめて作られるソルト・ドゥー (クッキーのよういろいろな形を作る) を木に飾ることも、豊作を願うことに繋がります。小麦は生命その

ものを象徴します。麦わら細工を飾る意味は古い信仰と結びついて守られてきました。素朴で美しい飾りです。



サンタクロース

サンタクロースは、紀元280年頃、今のトルコに生まれ、後に司教になった聖ニコラウス (セント・ニコラウス=オランダ語でシタクラウス=英語でサンタ・クロース) がモデルです。情け深く、貧しい人々を助け、子どもを愛したので、子どもや船乗りの守り神のように崇められてきました。私たちが一般に知っているサンタクロースは、太った陽気なおじいさんですが、国によって、様々なイメージがあります。もともとは司教服を着た聖ニコラウスが、ろばにプレゼントを載せ、一軒一軒良い子を訪ねて歩いて廻るのです。ドイツやスイスでは、今でもそのような伝統が残っています。北欧には、一般的なサンタクロースはもちろん、もうひとつ愛されているサンタクロースのような存在がいます。それは、ニッセとかトムテと呼ばれる妖精です。これらの妖精は、人形として作られて、人々に親しまれている存在です。これらの妖精は、豊穡をもたらす自然神のイメージがあり、家々に恵みを運んでくる存在なのです。今日のようなイメージのサンタクロースは誰が作ったかって？それは、いつかまたお話ししましょうね。



バングラデシュの人々から 頂いた恵み

7月13日

岩本 直美

本年度の合同礼拝は、去る7月13日（水）元JOCバングラデシュワーカー岩本直美さんをお迎えして行われました。

現地での体験をたくさんの方のスライドを用いてお話いただきました。

バングラデシュという国はインドのとなりの小さい国で、北海道の1.8倍しかない国土に日本の人口をはるかに超える一億五千万もの人がいます。イスラム教の国で、人口の86%の人がイスラム教、その他ヒンズー教徒やわずかなクリスチャン、仏教徒もいます。

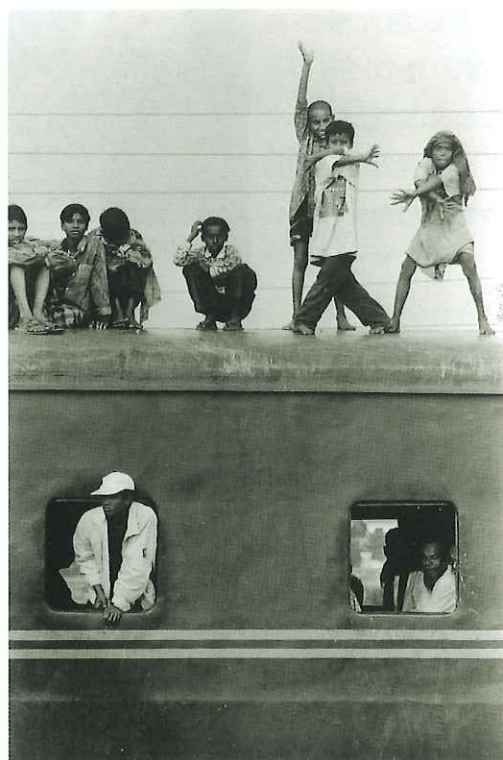
わたしがいたのは、インド国境に近いマイメンシンという小さな県で、そこにテゼ共同体という修道会の小さな共同体があり、ブラザーが4人おられます。わたしはこのブラザーたちと一緒に働いていました。敷地のまん中の教会では、朝昼晩と一日三回の祈りがあります。聖書に、「あなたは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、…病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」（マタ25:35-36）という箇所がありますが、ここには病気の人や障害を持っている人や悩みをもっているたくさんの方の人たちが訪ねてくるのです。まさにみ



マイメンシン・テゼ共同体

ことばのように人々を迎えておられる場所で、いろんな人たちが訪ねてきますが、みんなうれしそうな顔をしています。路上や駅で生活している子供たちもテゼにやってきます。実は、この幼い子供たちの多くは家族はいるのですが、あまりにも貧しくて、ちゃんとお飯が食べられない、親がかまってくれない。だから、幼い年齢にして、自分で家を出ることを決心します。そして多くの子が駅に向かいます。駅では、自然発生的にこういう子供たちがグループを作って、お互い助け合って生きています。でも駅の生活というのは、暴力にあったり、騙されたり、警察に引っ張っていかれたりもしますし、麻薬や、そして小さい子供たちでも性的な虐待の対象にされることがあり、常に緊張状態でみんな生きているのです。だから、週に一回来るテゼでは、だれもたたかないし、騙さない、こういう安心できる場所で初めて子供らしい笑顔を見せ、一緒に絵を書いたり、食事をしたり、そんな時を過ごします。

わたしはテゼのブラザーたちが設立以来深



駅の子どもたち

く関わっておられる障害者コミュニティーセンターで働いていました。バングラデシュの障害者は、とても差別や偏見が厳しい状況の中に置かれています。ここでセンターを8年前に始めるときに、ブラザーたちは「障害を持った人たちや家族にとって何より大事なものは、その人たちがありのままの姿で、人として心から受け入れてもらえる場所だ。その中で、人間対人間の付き合いをしながら、ここに集まってくる人たちがありのままの自分のよさ・すばらしさをしっかり再認識していくことが何より大事だ」と言われ、このことを一番大事な働きにしておられます。センターにはいろいろな障害の人が、赤ちゃんからお年を召した人まで集まってきましたが、わたしが主に関わってきたのが女性です。



女性達のミーティング

イスラム教の国では、女性と男性の区別がとても厳しいです。そういった社会的な背景の中で、赤ちゃんが生まれたときに女の子で障害があるとわかると、親たちは男の子には無理して三回食べさせても、障害を持っている女の子には一回だけ。こんなことがわりと日常に行われていました。そんな中で、何が一番つらいかというと、自分が人間としても女性としてもなんの値打ちもないと思っていることで、そう思いながら生きていくのはとてもつらいことです。わたしは一軒ずつ家々を回りながら、障害を持つ女性たちと出会い、とにかくうちから出てセンターに集まってくる、というプログラムをしました。センター

に来て初めて、同じような立場で生活している女性たち同士が会う中で、そしてみんなで思いのたけを話し合う中で、自分には何も悪いことはなかったということに気づいていきます。そうしてだんだんと、ありのままの自分の大事さに気がついていく。それはまるで花の小さなつぼみがパッと開くようで、わたしにとっては十字架にかけられたイエスさまが復活されるイメージと重なるのです。女性たちがありのままの大事さを取り戻していくと、今度はだんだん強くなっていきます。わたしはこれがしたい、こんなふうに生きていきたいと言えるようになっていき、自分で自分の生き方を選んでいくようになります。

今13・4歳になるある男の子がスラムに暮らしていました。あるときこの子のお父さんが何を怒ったのか、この子をパーンと放り投げたのです。その日以来この子は立つことができなくなり、排泄もコントロールできなくなりました。腰の骨が折れたのですね。その後、栄養状態もよくない中、足や腰など本当に多くの場所に床ずれができて、わたしたちが初めて会ったときには、このままの状態であらうと思いました。両親はこのままここで死ねばよいの一点張りでしたが、その後納得して、病院に長いこと入院して命は助かりました。わたし自身この子のことで驚いたことは、誰にも一度だって父親に放り投げられたということは言わなかったです。むしろわたしたちのほうが父親を許せなかったです。だけれどもこんな幼い子が父親のことをかばっていて、そして「お父さんに会いたい。早く面会にきてほしい」と、本当に父親を恋しがっていました。だからわたしたちもこの子のそういう態度をみる中で、石のようになっていた心を人間らしい心に変えていかれて、父親を赦し両親を受け入れてお互い信頼しあいながら、この子の将来のために歩むことができるようになりました。ジャン・バニエという



方がこんなふうに言っています。「誰かを愛するとは、その人の良さ・その人の価値・その人の素晴らしさを明らかにすることです。」この子がしたことはまさにこのことだったのですね。わたしたちのだけれも、この子の父親の良さ素晴らしさを明らかにすることはできませんでした。だけどこの子だけは、病院でお父さんに会いたいと、僕のお父さんはこんな素晴らしい人だから僕はこんなに好きなのだ、というメッセージをまわりの人に伝えてくれました。本当に愛するってこういうことなのだとこの子に教わりました。

この地域には知的な障害をもった子がたくさんいます。そういう子どもを持つ40家族ほどが毎月集まって、一緒に歌ったり踊ったり、そして分かち合いをしたり食事をしたり、そういう時をもっています。40家族の中のうちクリスチャンは1家族、2~3家族はヒンズー教、あとはみんなイスラム教徒の家族です。多くはスラムから来ている貧しい家族です。楽しい遊びの時を過ごす中で、そのイスラム教・ヒンズー教・キリスト教という違った宗教の人たちが、障害のあるなしとか、外国人・少数民族かどうかとか、そういう違いや隔たりを、障害を持つその子達がとりはらってくれて、ありのままのお互いを受け入れて、喜びのときを過ごすことができます。バングラデシュでは、この知的障害を持っている子に価値はおかれていません。しかし実は、この子らの中に本当の誇り高い賜物があるのだと私

は信じています。それは人の痛みを癒す賜物。隔たりを解き放ってくれる、そしてみんなをこのように一つのものに向かわせてくれる、そんな賜物だと思います。テゼのブラザー・フランクは、「違う宗教がどうしたら一致できるようになるだろうか、とそれを言葉でいくら語り続けても無理でしょう。けれど、貧しい人たち、小さくされている人たちに一緒に仕えていこうとするとときに初めて、そういった違い、隔たりといったものが取り払われていくのではないのでしょうか」ということをよくおっしゃいます。

この子供たちが遊んでいる間に、お母さんたちが分かち合いのときを持ちます。母親の立場もとてもつらいのです。産まれた子供に重い知的障害があると分かったとき、ご主人の多くはその妻のせいだと言って別の家庭を持ちます。お母さんは、自分の親兄弟にもおまえが悪いからこうなったと責められることが多く、経済的な支援もないままに、その知的障害をもった子供と家の中で二人だけで向き合って生きていかなければならない。そういうとき、お母さん自身も自分が悪かったと、だからこの子がこうなったと思い込んでしまう。そういう母親が多いです。だから、月に一回なのですが、こうやって同じ状況のなかで生きているお母さんたちが集まって、誰にも遠慮することなく話し合えるのですね。多くのお母さんたちは貧しくて読み書きもできません。そして人前で話すなんて経験もな



知的障害の子どもの母親達の分かち合い

かった。そんなお母さんが毎月同じメンバーの中で話し合っているうちに、だんだん自分の言葉で自分の思いを語れるようになっていくのです。教育を受けたこともない、読み書きもできないお母さんが、「私はこの子がいてくれたことを本当に感謝しています。この子のおかげでいい人たちと出会うことができた」とか、「この子のおかげで心の正しい人というのはどういう人のことを言うのかわかった。だからこの子にとっても感謝している」、そういう深い言葉を語ってくださるようになったことがあります。



サリーを着た岩本さん

バングラデシュで出会った人たちを通して、ありのままのあなたでいいから一生懸命生きなさい。生きるとはどんな状況の中でも素晴らしい、だから一生懸命生きなさいということ、いつも語りかけてもらっている気がしています。今日のみことば(1コリ1:27-29)にあるように、神様は無力なものを選ばれました。そして身分の卑しい者、見下げられているものを選ばれました。本当に神様の選びというものは不思議だと思います。神様はそういった一見弱いと思われる人たちを選び、ご自身の栄光を現します。そういう人たちというのは、自分自身の中には何も誇るものはない、ただ神さまの憐れみによって生

かされている、そんな渴きを持っておられると思います。だから神様もそういう人の中に入っていきやすいのではないのかなと思うんですね。だからわたしたちは小さな人たちのそばによりそっていき、その小さくされた人たちの声を耳をすませて聴き、眼を見開いてしっかりその人たちを見つめていく。それが大切だと思います。そこにこそイエス様がおられます。

このことはわたしたちにも言えることだと思います。自分にとって自分がいやだと思う部分、誰にも知られたくない部分、破れた部分、そういうところにこそイエス様がいってくださると思います。自分にとって砂漠のように思われるところ、その部分を含めたありのままの自分をしっかり見つめて、抱きしめて、生きていくということが大事かなと思います。

チャプレン・市原信太郎先生の司祭接手

チャプレンの市原先生は、去る9月24日(土)新潟において行われた中部教区宣教開始130周年記念礼拝・司祭接手式において、日本聖公会の司祭に接手されました。

中部教区はもちろん、私たちの大学にとっても大きな喜びです。この出来事を心から神さまに感謝しましょう！先生！これからも、ますますご活躍ください！



互いに支えあう

7月6日



元教務課長 吉田 正
7月をもって退職された吉田正さんに柳城生へのメッセージとしてお話を伺いました。

まずは自己紹介をしたいと思います。あまりそういうふうには見えないかもしれませんが、私はクリスチャンなんです。クリスチャンネームはバルトロマイと言います。人生はわからないなと思っています。

今思えば、中学一年のとき北海道にあるミッションスクールに通っていたことが影響していたのかと思います。北海道を出てからもYMCAなどで体育のリーダーをしていて、そこで、自閉症、昔は情緒障害と言われる子どもたちに出会いました。34、5年前はまだ障害、自閉症についてわかっていなくて、私はマンツーマンで、関わる中からその障害を持つ子どもたちと向きあいました。それが縁で、今スペシャルオリンピックに関わっています。

この程、世界16カ国が集まって、発達障害を持つ人達のスペシャルオリンピックが長野県であり、そこで仲間と一緒に活躍しました。よく彼らの活動を支えるために、ボランティアをしているという言い方がありますが、私は、彼らに「つきあっている」と言いたいのです。

ボランティアといえば、去年、中越大地震のときも本当にたくさんのボランティアが行きましたね。知り合いのコーチの家も全壊で、今も仮住まいに住んでいます。たまたまこのコーチと先日電話をする機会があり、非常に考えさせられる言葉がありました。「みなさんからのいろんなボランティアを感謝しています。助かりました。でも実はつらかったのです。支えられるということはこんなにつらいんだ。」と話すのです。私たちは、ボランティ

アはいいことだと望んでいくのですよね。でも「ささえられることのつらさ」この言葉を聞いたときは、私達のやっていることは、これでいいものかと思いました。また、被災者とボランティア、この関係というのはなんでしょう。「つらいんですよ」と話すことばを聞くと、私が今行っているスペシャルオリンピックも一緒なんです。

市原先生の言葉でとても心に残る言葉があります。それは、仲間・グループ・集団、お互いが補っていく関係には、上下関係などないという言葉です。

僕は先ほどボランティアをしているというよりも「つきあっている」と言いました。なぜこうしたことばを使うかというと、ボランティアを「している」、「していない」というのは上下関係があるのです。さきほどの聖書の先(マタ13:1~9、18-23)を読んでいきますと、神様の愛というのは14項目でてくるのです。その愛そのものがボランティアだと思うのです。本当に相手の立場に立つというのはどうということなのかと言いますと、次のことであると思います。それは、市原先生の説教を聴いていてふと気がついたことなのですが、お互いの持っている能力を、または足りないところを補っていく関係ではないかと思うのです。聖書にでてくる賜物ってというのは何を言っているのかと言いますと、「神様は一人一人に大きな力と個性を与えてくれました。(みなさんいいものを持っています。)」ということなのです。その個性を認め合っていく仲間になれるかどうかということが課題なのです。

是非みなさんに言いたいのは、折角ミッションスクール柳城に来たのですから、ここで学ぶことは、保育の心、幼児の心を学ぶことではないかなと思います。そして、保育の現場・介護の現場で、互いに成長しあう仲間との関係を学ぶことだと思います。残りの学生生活を互いに楽しんで、良い保育者や介護の道へ進んで頂きたいと思います。

キリスト教Q & A

一宮聖光幼稚園副園長・一宮聖光教会牧師
司祭イサク 伊藤 幸雄

Q.「キリスト教保育」にふさわしい保育者とはどんな人ですか？

A.私が勤めている幼稚園も、「キリスト教保育」を掲げていますが、いったいこの「キリスト教保育」を担っているのはどういう人たちでしょうか？ちょっと考えてみましょう。

以前、私は障害を持っている子どもたちが通う施設で働いていました。そこに就職するとき、私が思っていたことは次のようなことです。自分はキリストチャンである。キリストチャンというのは社会に奉仕する生き方をしなければならない。相手が障害を持っている人間だったら最高。私は胸を張って、「キリストチャンとしてふさわしい仕事をしています」と言える。このように考えて、障害を持っている子どもたちが通う施設に就職しました。ところがおっとどっこい。そこで働いていた先輩職員たちの大半はキリストチャンではない人たち。彼ら彼女らが、本当に子どもたちのことを親身になって考え、全身全霊を尽くして働いていました。その場所において、私がキリストチャンであるということは、ほとんど意味をなしませんでした。いや、かえって自分はキリストチャンであるという意識がマイナスになることがしばしばありました。キリストチャンだったらそうでない人たちよりも子どものことを思う、愛にあふれているなんてとんでもない。「奉仕する」というのも自己満足のために相手の存在を利用することにもなりかねない。「私はキリストチャンだ」とかんでしまると、感受性が鈍って相手の心が見えない。私はそういう状態に陥っていました。傲慢でした。

そんな傲慢な私が先輩職員たちから次第に打ち碎かれ、さらに大病を与えられ、半年以上療養することになってしまいました。その

とき根本的に自分のこれまでの生き方、自分がキリストチャンであることの意味を考え直す期間を与えられました。キリストチャンであろうとなかろうと、人間の価値には何ら変わりはない。かえって自分はキリストチャンとされている人たちの方に問題有りといったこともあります。すべての人は宗教がどうであろうと、何教を信じていようがいまいが関係なく、たったお一人の神さまのご配慮、ご親切の内に生かされている。目の前にいる子どもたちを見つめ、自分の感受性を働かせて相手の心を受け止め、共に生きていこう、共に育ち合おうと決心して向かい合うとき、きっとすばらしい世界が繰り広げられていくと思います。いっしょに泣き、笑い、顔を見合わせて共に喜ぶことのできる、振幅の大きい感動の人生が約束されています。

とても簡単なことです。骨惜しみして楽しむようと思ったり、上司を恨んだり同僚をねたんだり、いない人の悪口を言ったり。年数が経ってある程度の地位につけば、今度はいばったり、お金の目がくらんだり。そういうことを避けて、子どもたちだけに目を向けて、子どもたちとのことを自分の楽しみ、生き甲斐にするとき、気がつけば同じ思いを持った仲間がいる。経験豊かな先輩がいる。その人たちと共通の願いを持って、支え合い助け合いながらがんばっていくことができます。「キリスト教保育」を担うことができるのは、そういう人たちなんだと思います。そこに損得を超えた感動の人生が開かれるのでしょうか。

「キリスト教保育」とは、子どもにお祈りをさせたり、聖書のお話を聞かせたりすることだけではありません。キリスト教を掲げる幼稚園、保育園そのものの経営体質、方針、子どもへの関わり方において、イエス・キリストにおいて示された「愛」が徹底的に具体化されるように日々努力してこそ、キリスト教保育と言えます。こんなこと書いちゃうと自分で自分の首を絞めることになってしまいますね。しまったな…。



報告とお知らせ

今年度前期に行われた、チャペル関連の諸行事についてご報告します。

▼4月6日(木) 全学始業礼拝

▼4月27日(水) 大西修司祭(名古屋聖マタイ教会牧師) 講話

いつもホールの使用などでお世話になっている大西先生は、ご長男を亡くされた経験から「人の痛みが分かる人になること」についてお話しくださいました。

▼4月21日(木)～22日(金)

学外合同ゼミナール

合同ゼミでは、初めの礼拝と2日目の朝の礼拝を全員で行いました。2日目は、今回講師をしてくださった三輪先生の息子さんがスピッツのメンバーということで、「空も飛べるはず」を歌いました。

▼6月8日(水) 平松ちづ代先生

(附属三好幼稚園園長) 講話

保育現場での体験の中から、「子どもたちを愛すること」についてお話しくださいました。

▼5月25日(水)、6月1日(水) テゼの祈り

保育科2年生の実習中、保育・介護専攻の礼拝を「テゼの祈り」という形式で行いました。希望する1年生にも参加してもらいました。歌と沈黙が中心の静かな時間でした。

▼6月22日(水) 下原太介執事(岐阜聖パウロ教会牧師補) 司式・講話

昨年はマタイ教会勤務で、2年生以上にはおなじみの下原先生に、チャプレン出張中の礼拝をお願いしました。ふだんより出席が多かったという話も!?

▼6月29日(水) 渋谷勝治さん(本学事務局) 講話

クリスチャンであるご自分の生き方を、「あしあと」という詩をひいてお話しくださいました。

▼7月6日(水) 吉田正さん(本学元教務課・入試広報課長) 講話

パラリンピックの団長を務められた経験から、ボランティア、人との支え合いについてお話しくださいました。(内容は本号参照)

▼7月13日(水) 全学合同礼拝

岩本直美さん(元JOCsバングラデシュワーカー) 講話

「バングラデシュの人々から頂いた恵み」という題で、写真を見せながら、様々な人々の物語を語ってくださいました。(内容は本号参照。ただしほんの一部しか収録できませんでした。) また、今年度は試みとして、礼拝堂の椅子を取り払い床に直接座る方式で礼拝を試みましたが、いつもの窮屈さが若干なりとも緩和された印象がありました。



クリスマス展ご案内



本学の所蔵するクリスマスに関するかわいい小物を展示しています。本誌p2～3にご紹介したようなものが皆様のお越しをお待ちしています。

詳しくは宗教掲示板をご覧ください。

期間 2005年12月7日(水)

～2006年1月13日(金)

場所 被服室

主催 名古屋柳城短期大学・宗教委員会

2005年12月10日発行 第10号

発行所 名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54

編集兼
発行者 名古屋柳城短期大学 宗教委員会

印刷所 株式会社 丸和印刷



この印刷物は再生紙を使用しています。